

ジョルジェ・アマード『丁字と肉桂のガブリエラ』（九）

第二部第四章、原文二三九頁から二七一頁までの翻訳

尾 河 直 哉

（承前）

友が謳うガブリエラの詩^{うた}

第四章

月明かりのガブリエラ

（まだ子供なのか、それとも民衆の娘なのか？）

姿を移すのはなにも町、港、大小の村ばかりとはかぎりません。

風俗も移り変わり、人もまた変化するものであります…

（ジェズイノー・メンドンサ大佐事件の公判におけるエゼキエル・プラード博士の口頭弁論より）

ああスルタン、わたしのあの娘を、
快活なあの娘をいっただいどこへ。

余は王宮と宝玉まばゆき玉座を、

金の刺繍の履き物を、

あの娘に与えてやった。

指には翠玉、紅玉、紫水晶を、

服には金剛石をあしらって、

世話の女官も与えてやった。

天蓋のわが臥所に招き寄せ、

あの娘こを后と呼んでもみた。

ああスルタン、わたしのあの娘こを、
快活なあの娘こをいっただいどこへ。

あの娘この欲ほしがるものときたら、
ただ野の花を摘む平原だけ。

あの娘この欲ほしがるものときたら、
ただ姿を映す質素な鏡だけ。

あの娘この欲ほしがるものときたら、
ただ体を温める陽の光だけ。

あの娘この欲ほしがるものときたら、
ただ心和ませる銀の月だけ。

あの娘この欲ほしがるものときたら、
ただ心を満たす男たちの愛だけ。

ああスルタン、わたしのあの娘こを、
快活なあの娘こをいっただいどこへ。

余は後の衣装で装わせ、
快活なお前の愛し子を、
宮廷舞踏会にも連れて行つた。

あの娘こは大公妃に話しかけ、
博士たちと会話を交わし、

外国の踊りを踊つた。

最高級のワインを飲み、

ヨーロッパの果物を嚙り、

王の腕に抱かれて、

ますます后になりまさつた。

ああスルタン、わたしのあの娘こを、
快活なあの娘こをいっただいどこへ。

あの娘こをもとに戻してください。

いつもの竈に、

庭のグアバの木に、

船乗りの踊りに、

キャラコの安衣装に、

緑色のスリッパに、

汚れなき心に、

偽りなき微笑みに、

寄る辺なき捨て子に、

臥所のため息に、

切ない愛の求めに、

戻してください。

あの娘をもう変えないでください。

こうして謳う、ガブリエラを。

丁字と肉桂でできたガブリエラを。

靈感に満たされた詩人と金のことしか頭にない さもない人々

「靈感に満たされた、わが国の傑出した詩人にしてバイーア文学界の誇り、アルジレウ・パルメイラ博士です」と、誇らしさを声に滲ませながら博士が紹介する。

「詩人ねえ…」リベイリーニョ大佐は怪訝そうな目で応じた。詩人と称するこういう手合いは、たいがい体のよい寄食者にすぎねえからな。「はじめまして…」

靈感に満たされた詩人とやらは、年の頃五十歳くらいだろうか。押し出しも立派な巨漢。明るい肌のムラートで、長髪を獅子のたてがみのように振り乱し、鷹揚な笑みを浮かべている。縦縞のズボンを穿き、焼けるように暑い日だというのに、上着の下には黒い混色織のチョッキを着込んでいた。金歯がいくつかが光っている。まるで保養地にやってきた上院議員といった風情で、粗野な内陸の人間が詩神とその選民にたいして抱く警戒心に対しては明らか

に慣れっこになっているようだった。チョッキのポケットから名刺を取り出し、咳払いをしてバールの客の注目を惹くと、抑揚のあるよく響く声で切り出す。

「法学士おならびに社会学士すなわち正弁護士にして文学士。バイーア州セルタン地帯ムンド・ノーヴォ司法区検事であります。どうかお見知り置きを」

詩人は頭を下げると、あつげにとられているリベイリーニョに名刺を手渡した。大農場主は眼鏡を探してきて読んだ。

アルジレウ・パルメイラ博士

学士

（法学、社会学、科学、文学）

検事

桂冠詩人

批評家により認められたる六著作の著者

ムンド・ノーヴォ・バイーア パルナッソス

リベイリーニョはすっかりどぎまぎして椅子から立ち上がると、かろうじて言葉を発したが、二の句が継げなかった。

「これはこれは博士先生…なんなりとご用命を…」

ナシブも大農場主の肩越しに名刺を読んで驚き、頭を振る。

「いやまったく。なんともまあ偉いお方で」

詩人は一刻も無駄にしたくなかった。革製の書類鞆をテーブルの上に置くと、そそくさと開く。イリエウスはバイーア州最大級の都市で、訪れるべきところはたくさんある。詩人は、講演会のチケットの最初の一メを取りだした。

パルナツソスに住まうこの貴顕も、胃袋がつねに魂に勝るさもしくも汚れたこの俗世においては、悲しいかな、物質的な不測の事態に捕らわれて生きるしかない。かくて、詩人はかなり目覚ましい世渡り感覚を身につけることになった。講演「ツアー」に出たときなど、行った先々で意図的に自らを誇示し、そこから最大限の利益を引き出していた。とりわけイリエウスのように豊かで金回りの良い土地にやってくると、うまく立ち回ろうと身構える。遅れた内陸の町で、詩を馬鹿にし講演会を疎ましく思う住民から木で鼻をくくるような態度をさんざん見せつけられてきたものだから、その雪辱に、ここではぜがひでもなにがしかの敬意を得ようというのである。ただ、厚かましいほど落ち着き払っていけば、そんなに酷い扱いは受けないし、しぶとく粘っていればたいいなにがしかの戦果は得られる。少なくともチケットの一枚くらいは売れるのだった。

それだけでなくも大所帯なのに、ますます数が増える子どもたちを、検事の収入だけで養ってゆくことはできなかった。ただし、大所帯といっても、その数はひとつではない。少なくとも三つ。凡夫にとってはおそらく素晴らしい人の世の掟も、傑出した

詩人には煩わしいのだろう。「学士」様アルジレウ・パルメイラのごとき例外的人間にとってそれが窮屈なことはあきらか。結婚と一夫一婦制がさしずめその一例だった。真の詩人がこんな檻にすごすごと入るだろうか。母屋と呼べそうな建物には、かつては元気よくびよんぴょん跳ね回っていたものの今となつてはめつきり老け込んだアウグスタが住んでいたが、この女性とは二十年ほど前から同居しているにもかかわらず、決して結婚しようとはしなかった。アウグスタには最初に書いた二冊の本が捧げられている。『翠玉』^{エメラルド}と『金剛石』^{ダイヤモンド}がそれで（詩人の著作はすべて貴石か半貴石がタイトルになっている）、そのお返しにアウグスタは五人の丈夫な赤ん坊を産んだ。

神々を愛でる詩人が、たったひとりの詩神で満足などできようはずなどない。詩人には、つねに新たな靈感の泉を求める必要があるのだ。アルジレウ・パルメイラが詩神を取り替えるやり方は大胆だった。いつも通る道でたまたま出会った女性が、たちまちベッドのなかのソネットになる。詩人は、靈感を与えてくれるさらに二人の詩神とも、新たな家族と著作を産み出した。家の給仕を務める若いムラータで、詩人の三人の子どもの母親でもあるライムンダには、『土耳古石』^{トルコ}と『紅玉』^{ルビー}を彫琢している。『青玉』^{サファイヤ}と『黄玉』^{トパース}は自らの境遇に満足できない寡婦クレメンティーナに捧げられ、クレメンティーナからはヘラクレスとアフロディテが生まれている。二人に捧げられたこれらの本のなかに、あちこち

のより小さな詩神に向けて作られた詩が存在することは間違いない。これら二人の子どもは認知されていたが——ギリシアの神々と英雄の名前で洗礼と届け出がなされたことは、大いに神父たちの顰蹙を買った——その他にもまだ子息が存在する可能性はある。詩人は十二人の糊口を凌がなければならなかった。十二人というのも、父親の神話的な食欲さを受け継いだ、さまざまな年齢の丈夫な十人のパルメイラの他にも、クレメンティーナが亡き前夫との間にもうけた子どもが二人加わっていたからである。裁判所が休暇に入るとこうして文学説法の旅に出るのは、とりわけこの子たちのためであり——そして、周囲の景色を変えたい、新しい土地を見てみたいという自らの嗜好のためであった。自著のストックと講演をひとつふたつ詰め込んだ巨大な黒い旅行鞆。その下ではこの世でいちばん屈強な荷担ぎの双肩が重荷にたわんでいる。

「一枚だけですか？ そんな……奥さんはお連れにならないと。お子さまがたはおいくつ？ 十五歳にもなれば、わたしの講演に込められた詩情と理想からなにがしかのものを吸収できます。しかも、きわめて教育によろしいときている。若人の魂を涵養するにはびつたりですぞ」

「品のない話なんぞなさらないでしような」、とりベイリーニョが訊く。毎年一度やってくるレオナルド・モッタの講演会を思い出したのだ。モッタの講演会は無料ということもあってホールは立錐の余地もないほど混み合うが、話の中身は奥地(セルゲン)の風習について

である。「下品な小話なんぞ」

「この私をいったいだれだとお考えですか？ 道徳心の塊ですぞ。この上なく気高い心を持っている」

「いや批判しようってんじゃなくて。いやむしろ、わたしはあの手合いが好きなんです。わしが我慢できるのはあの講演会だけでしよう」そして、またもやどぎまぎながら、「つまりですな。お気を悪くせんください。おもしろいわけでしょう、あれは、ね？ わしはほら、田舎者だから。教養もあんまりないし。講演会聞いとると眠くなっちゃうんですわ……実は妻と娘たちのためにお訊きした次第で……とくりや、ほら、品がなきゃあの子たちを連れてゆくわけにも行かんでしょ」と続けてから「チケット四枚でおいくらかね」と締める。

ナシブが二枚、靴屋のフェリーペが一枚買った。講演会は翌日の晩、行政監督局の貴賓室で催されることになっていた。紹介の労を執るのは大学でアルジレウの学友だったエゼキエル・プラード博士である。

詩人は作戦の第二段階に入った。最も難しい段階である。チケットの購入を拒否した人はほとんどいなかったが、本となるとそうもゆかない。小さな活字で韻文がぎつしり並んだページを目にすると、大抵は顔をしかめる。いささかなりとも興味があつてあるいはつき合いから買う気を起こした人も、値段を尋ねるとどうしてよいのか途方に暮れてしまう。なにしろ著者がこんな返

事をするからである。

「お気に召すお値段でけっこうです：そもそも詩とは売り物じゃございません。印刷、紙、製本にお金がかからなんだら、詩人としてはみなさんに無料でふんだんにお分けしたいところですが、しかし、人生の卑しい物質生活を免れ得る者などおりましようか？ わが最新にして最も注目すべき詩の数々を集め、国の北から南へずいといと知れわたり、しかも批評家たちに熱狂的に受け入れられたるこの本にも、実は目の玉が飛び出るほどの制作費がかかっております。いまだその全額を払い終えていないのが実情でありまして：ぜひともみなさんのご賢明なご判断をいただきたく：」

カカオ輸出業者や大農場主を相手にするときには有効なテクニクである。ムンデイーニョ・ファルカン^{ドクトール}はチケット一枚を買ったうえに、本一冊に百ミルレイスを出した。ラミーロ・バストス大佐が本に出した金額は五十ミルレイスだったが、その代わりにチケットを三枚買い、翌々日、本人を夕食に招いた。アルジレウは訪れる土地の特殊事情について前もって情報を仕入れていたので、イリエウスを二分する政治闘争のことは知っており、ムンデイーニョとラミーロはもちろん、両陣営の重鎮にたいする紹介状をしつかり携えていた。

長年、辛抱強くかつ大胆に自らの著作を売り捌いてきた経験から、恰幅の良いこの詩人は、買い手が自ら進んで大金を落として

くれるかどうか見当がつくようになっていた。すんなり行かない場合は回り道を強いられる。

「二十ミルレイスいただければ、直筆署名いたしますよ」

脈はあっても相手がなかなか首を縦に振ってくれないばあい、最後の手段に打って出る。

「私の詩にご興味をお持ちのようですから、思い切って十ミルレイスでお譲りいたしましょう。美しいうたかたの夢をお宅さまから奪わないために！」

手に本を握らされたりベイリーニョは頭を掻いた。いくら払ったらよいものか。博士に目^{ドクトール}で訴える。こりゃ体の良い強請りだな。金をドブに捨てるようなもんだ。ポケットに手をつ突つ込むと二十ミルレイス以上を取り出した。博士のおつき合いだ。ナシブはなにも買わなかった。ガブリエラは字が読めないし、ナシブ自身にしてみても、ボールで朗読されるジョズエーとアリ・サントスの詩だけですでに十分だった。靴屋のフェリーペはぜったいに買わないと言う。だいたい酔っ払っていた。

「旦那、ペルドーネ・メ・ウス^{ドクトール}テ（申し訳ないが）、俺は散文、しかもある種の散文——フェリーペは「ある種の」を強調した——しか読まないんでね。ノベラス・ノー！（小説なんてまっぴらだ！）聞く散文。山を動かし、デ・エサス・ケ・カンビアン・エル・ムンド（世界を変えるやつ）だけよ、俺が読むのは。旦那、クロポトキン^{ドクトール}はもう読んだかい？」

詩人はたじろいだ。もちろん、と答えたかった。クロポトキンの名は知っている。しかし、結局、大言壮語でこの場を切り抜ける方がよいと考えた。

「詩人は政治を超越しております」

「イ・ヨ・メ・カーゴ・エン・ラ・ポエシア、セニョール・ミオ（俺はね、旦那、詩なんて糞喰らえなんだよ）」と言って人差し指を立てると、「クロポトキン・エス・エル・マス・グラン・デ・ポエタ・デ・トードス・ロス・ティエンポス（クロポトキンはこれまでで最高の詩人さね）」興奮したり酔ったりしたときの常として、フェリーペはすでに混じりけなしのスペイン語で話していた。「マヨール・ケ・エル・ソ・ラ・ディナミータ（あいつに敵うのっていったらダイナミトだけだね）。ビバ・ラ・アナルキア（無政府主義万歳）！」

バールに着いたときにはすでにかなり酔っていたフェリーペは、バールでも飲み続けた。こうした行為が見られるのは一年にたった一度だけ。だがこれが、何年も前にバルセロナでデモ中に発砲を受けて射殺された兄を弔う記念行事であることを知る者はほとんどいなかった。この兄というのが、紛れもない戦闘的無政府主義者で、燃え上がる頭脳と恐れを知らない心の持ち主だった。フェリーペは亡き兄が書いた政治的パンフレットや本はどうにか掻き集めたものの、破れた旗を再び高く掲げることはしなかった。兄との血縁関係から賊の一味だと疑われないよう、スペイン

から脱出する方を選んだのである。とはいえ、あれから二十年以上経った今でも、デモで街路に死者が出たその日になると、フェリーペは仕事場を閉め、酒に酔っては、いつかきつとスペインに戻って爆弾を破裂させ兄の仇をとってやるんだと息巻くのだった。ビコリフィーノとナシブが弔いの日のスペイン人をポーカール室に連れて行った。ここならいくら飲んでも誰にも迷惑をかけない。フェリーペはスペイン語でナシブにくつてかかる。

「ケ・イシステ、サラセーノ・インフィエル、デ・ミ・フロール・ロハ、デ・ラ・グラシア・デ・ガブリエラ（おいこら不信心なサラセン人、俺の赤い花、美しいガブリエラをどこへやった）。テナ・オホス・アレグレス、エラ・ウナ・カンシオン、ウナ・アレグリア、ウナ・フィエスタ（あの娘の生き生きした目、ありや歌だった、喜びだった、祭りだった）。ポル・ケ・ラ・ロバステ・パラ・ティ・ソラメンテ、ラ・プシステ・エン・プリソーン（なんで自分ひとりのために盗んで、牢屋なんかに入れちゃったんだよ）？ スシオ・ブルヘス（この汚ねえブルジョワ野郎）」

ビコリフィーノはフェリーペのためにカシャサを一本持つてくるとテーブルに置いた。

このスペイン人がなぜ今日酒を飲んでいるのか、博士は詩人に説明し、許しを請うた。フェリーペはふだんは礼儀正しく、尊敬に値する市民なんだが、一年にたった一度、どうもその…

「よく分かります。人間、時には少し酔わないと。上流社会の方々でさえなさってますよ。かく言う私もいささか嗜んでいる具合でございます。いつものピンガを少々：」

リベイリーニョが聞き耳をそばだてた。酒の話だ。話題が自分の得意分野に入ってきたので、リベイリーニョはさまざまな種類のピンガについて蘊蓄を垂れ始めた。イリエウスには「イリエウスの砂糖黍」といわれる最高のカシャサがあつてですな、ほとんどがスイスに輸出されとります。かの地ではウイスキーのようによく飲まれているわけでござんして、あのミスター——イギリス人で鉄道会社の社長であることをアルジレウに説明する——なんぞもこればかり飲んだるようです。それにしてもあの方、酒のことはまあよくござんして：」

リベイリーニョの演説はたびたび中断させられた。食前酒の時間になって次々とやってくる常連客に、詩人を紹介しなければならなかったからである。アリ・サントスが諸手を広げて詩人を強く抱きしめる。ここにはお名前を知る者、作品を読んでいる者が多いですよ。ご訪問はイリエウスの文化生活の年鑑にも載るでしょうなあ。詩人はすっかり嬉しくなつて感謝の言葉を口にした。ジョアン・フルジェンシオは名刺をじつくりと眺めてから、丁寧にポケットのなかに仕舞い込んだ。アリ・サントスからチケット一枚もぎ取り、献辞入りの本をアリサントスに一冊、マヌエル・ダス・オンサス大佐にもう一冊押しつけたあとで、アルジレウは

博士、^{ドクトール}ジョアン・フルジェンシオ、リベイリーニョ、アリ・サントスとテーブルに着いた。ひとつ、美味を絶賛された「イリエウスの砂糖黍」とやらを飲んでみようというのである。

そのカシャサを吸いながら、新たに加わった友人たちに囲まれ、権威のオーラを少しづつ脱いでいった詩人はなかなかのおしゃべり好きだった。その雷鳴のようによく響く声は楽しい小話を語り、大声で笑い、今朝船を降りたところか何年も前からそこに暮らしているかのように、土地で起こった出来事に興味を抱く。そのくせ、新しい客が店に入つて来るとほとんどそのたびごとに紹介してもらい、書類鞆から講演チケットと本を取り出すのだった。

ついに、ニョーガ^{ドクトール}の提案で、仕事がいやくなる一種のシステム化が考案された。チケットと本の両方とも買えそうなターゲットのばあい、博士が紹介を担当する。チケットは買えそうだが本まで行きそうにないばあいは、アリ・サントスがその役を引き受ける。独身男で、チケット代すら不如意なばあいにはニョーガ^{ドクトール}が紹介の任に当たる。こうすれば時間を無駄にしなくてすむだろう。ただ、詩人はこのシステムにいささか気乗りしない様子だった。

「それだとなにか騙しているようで：私にも経験があるんですが、ときに、思いも寄らない人が本をお買いあげくださるんですよ：要するに値段なんてないようなもんでして：」

後からジョズエー、隊長、^{カピタン}トニコ・バストスが加わった円

卓の真ん中で、詩人はすっかり面の皮を厚くさせられていた。ニョー・ガロが請け合う。

「ここらじゃ、先生、騙される奴なんかおりませんで。あたしら客ひとりひとりについて勝算も趣味も文盲度もよくわかってるんですから」

黒人小僧がひとり店に入ってきてサーカスのチラシを配り始めた。明日が初日とある。詩人は不安におののいた。

「これはまずい。明日は私の講演会の日だ。この日なら、ふたつの映画館とも子どもの映画を掛けるから、そっちに行く大人も少なからうと思つて選んだんだが。そこへ降つて湧いたようにこのサーカス話だ……」

「でもよ、先生。チケットは前もつて売つてゐるわけだろう？」

現金払いで。それじゃ、心配することないだろう」と、トリベイリーニョがなだめる。

「いや、でも考えてもみてください。ガラガラの客席を前に話をしなければならんですよ。半ダースの人を相手に自作の詩を朗読するなんて。ブラジルとポルトガルではいささかなりとも名が知れ、名誉にも包まれているこの私が……」

「心配なく」とセレブが集うテーブルの脇に立つてナシブが言う。「イタブーナから来たちつぽけな移動サーカスです。たいした代物じゃありません。猛獣もないし、これといった芸人もいない。あんなもの見に行くのは子どもだけです……」

詩人はクローヴィス・コスタに昼食の招待を受けていた。下船してまず訪問したのが『日刊イリエウス』編集室だった。このあとそこまで案内してもらえまいか、と詩人は博士に尋ねた。

「もちろん喜んで。ではわが令名高き友人よ、クローヴィス家にまいりましょう」

「われわれと一緒に昼食はいかがでしょう？」

「わたしは招待されていませんし……」

「でも私は招待されていますから、私をご招待いたしますよ。あそこの昼食はぜひお試しにならなくては。並みの家庭料理などかないませんぞ。いわんやホテルの食事においておや、ですな。あれはまずくて少なくて。ほんと、ちょぴりですからなあ」

二人が出て行くと、リベイリーニョがコメントした。

「あのダブル博士はびつたり息が合つとるのお……なんでもかんでも呑み込んでしまうわ。チケットでも、本でも、昼食でも……あれなら大蛇も呑み込めるんじゃない……」

「バイーア州の大詩人のひとりですからね」と断言するアリ・サントス。

ジョアン・フルジェンシオは名刺をポケットから出す。

「少なくとも名刺は素晴らしい。こんな名刺は見たことないもの。なにしろ『学士』様だから。パルナッソスにお住まいで……しかし、アリ、読まないうちからこんなこと言つてナンなんだが。その詩は嫌いだな。きつとたいしたものじゃないと思う」

「ジョズエーはリベイリーニョが買った『黄玉』^{トパース}をめくって小声で読み始めた。

「勢いがないなあ。貧血ぎみだ。詩には成長なんかありえないと言わんばかりの時代遅れ。この未来派の時代に……」

「そんなこと言うもんじゃない……冒涇だぞ」アリが苛立つ。

「ジョアン・フルジェンシオ、ちよつとこのソネットを聞いてくれ。神々しいから」と言うと、さつそく麗々しくタイトルを朗読する。「滝の轟き」

しかしアリはそこで止めなければならなかった。スペイン人フェリーペが奥から千鳥足で出てきて、テーブルの上に倒れ込み、わけのわからない声を出したからである。

「サラセーノ、ブルゲス・スシオ、ドンデ・エスタ・ガブリエラ（サラセン人の汚いブルジョワ野郎、ガブリエラはいつたどこに行った）？ ケ・イシステ・ミ・フロール・ロハ、デ・ラ・グラシア（俺の赤い花を、あの美人さんをいつたどうしたんだよ）……」

近ごろ毎日弁当を持ってくるのは、料理見習いの若いムラータだった。フェリーペは椅子にぶつかってよろめきながら、あの明るく美しいガブリエラをどこに葬ったんだとナシブに迫る。ビコリーノはフェリーペをどうにか奥のポーカー室に押し込めようとする。ナシブは手で申し訳ないという仕草をしたが、それがフェリーペの状態を謝っているのか、それとも明るくて美しい

ガブリエラが居ないことを謝っているのかだれにも分からなかった。他の客たちはじっと黙り込んでいる。お昼になるとガブリエラがバラを耳に挿してやってきていたあのころの活気は、今どこにいつてしまったのだろう。客たちはガブリエラが居ないことの重みをいまさらながら感じていた。バルから暖かさも親密さも失われてしまったような気がするのだ。トニコが沈黙を破った。

「詩人の講演会の演題知ってるか？」

「いや。何？」

「『涙と郷愁』だつてさ」

「やれやれ退屈することになんぞ」と言ったのはリベイリーニョだった。

サアド夫人の過ち

サーカスの千秋楽だった。ちびくろトウイスカが揺れる支柱の前に立ったまま頭を振っている。三角帆船のマストほど小さな支柱だった。これ以上小さな支柱も、これ以上揺れる支柱も想像できない。テントの帆布は満天の星を頂いた夜か物乞い瘋癲女マリーア・メ・ダーの檻樓のように穴だらけ。港の空き地の隅に哀れな姿を晒す魚屋の屋台とさして変わらぬ大きさである。ただ、ありとあらゆる試練を経ても、トウイスカが「サーカス 三つのアメリカ」にたいしてすっかり興味を失うことはなかった。そ

れにしても、「バルカン大サーカス」とのなんという違いだろう。あちらのテントは巨大。猛獣の檻はあるし、道化師も四人いる。こびとや巨人だっているし、馬はきちんと調教されている。空中ブランコの曲芸師なんか、どんな大胆な曲芸でも見せてくれるではないか。あれは町にとっちゃお祭り騒ぎだったなあ。トゥーイスカは「バルカン大サーカス」を一度たりとも見逃したことはなかった。それに比べてここは……と、頭を振る。

トゥーイスカの小さな胸の裡にはさまざまな人にたいする敬愛の念が密かに滾っていた。幸いリユーマチの症状が軽くなり、洗濯とアイロン掛けに勤しんでいる母親のライムンダ。トニコ・バストスの娘で、密かに思いを寄せる金髪のロジーニャ。ガブリエラさんとナシブさん。善良なドス・レイス姉妹。ハンドルを握られば右に出る者のない、トラックとバス運転のヒーロー、兄のフィロー。そしてサーカス団員。記憶にあるかぎり、イリエウスにサーカスのテントが立つときには必ずトゥーイスカの積極的な援助が一役買っていた。道化師にくつついて通りを練り歩き、雑役夫に手を貸し、仲間の子どもたちにやんやの拍手をさせ、欠かすことのできない伝言係をせつせと務める。サーカスが好きなのは、ただたんにそれが最高の娯楽だからとか、派手な魔術や冒険に引き込まれたから、というわけではなかった。サーカスに通うのは、己の運命を全うするためだったのである。一緒に町を出て行かなかったとすれば、それはひとえにライムンダのリユーマチ

のためだった。家に居てライムンダの面倒を見る必要がある。あれこれ仕事をして金を稼がなければならない。こつこつ靴磨をする一方で時にはウェイターもやり、ドス・レイス姉妹の美味しいと評判のお菓子を売る一方で付け文を運んだり、アラブ人ナシブを手伝って上手に飲み物も作る。そのトゥーイスカが、今回やってきたサーカスのあまりの貧しさにため息をついた。

「サーカス 三つのアメリカ」は息も絶え絶えにここまでやってきた。歯の抜けた老いばれライオンが最後の猛獣だったが、船で輸送してもらえると聞いてコンキスタの行政監督局に譲った。サーカスでは餌をやることさえできなかったもので、ありがたかった。「まるでトロイの木馬だな」行政監督局の言いぐさである。新たな広場に着くたび、遅れている給料の支払いを要求もせず、団員はひとりまたひとりと抜けていった。舞台に敷く絨毯にいたるまで、ありとあらゆるものを食料品に変えていったすえ、最後に残ったのは団長の一家だけだった。団長、その妻、結婚した娘ふたり、独身の娘ひとり、婿ふたり、切符をもぎるとそのあとと雑役係に指示を出す親戚らしき人物ひとりである。この七人が曲芸、宙返り、剣呑み、火喰い、綱渡り、カード・マジック、黒塗りの平均棒でバランスを取りながら作る「人間ピラミッド」を交替で演じる。老団長は道化師にして手品師だった。団長が鋸で音楽を奏で、それに合わせて三人の娘が踊る。第二部の出し物は全員で演じる「道化師の娘」。道化芝居とお涙頂戴のミックスで、「典雅

なるお客様がたを爆笑とむせび泣きへ誘う哄笑と感動の悲喜劇である。こんなサーカス団がいったいどんな風の吹き回しでリエウスくんだりにやってきたのか。神さますらご存じない。いや実は、船に乗れるだけの元手をこの町で作ってバイーアまで行き、バイーアでもっと羽振りの良いサーカス団に参加しよう、という魂胆だった。イタブーナでは乞食同然で、既婚者二名、未成年の未婚者一名、計三名の娘がキャバレーで踊り、全員分の稼ぎを賄った。

サーカス団にとってトゥイースカの存在はまさに天佑だった。おとなしい団長を警察署長のところ（警察から免税権を得るため）、ジョアン・フルジェンシオのところ（演目のプログラムを印刷してもらうため）、シネマ・ヴィトーリアのコレス氏のところ（映画館を改築したときから倉庫に眠っている古い椅子を、レンタル料金なしで貸してもらうため）、サポ通りの悪名高い居酒屋カシャサ・バラータ（トゥイースカが間に入って、例のごろつきから雑役夫をなんにんか臨時に雇い入れるため）に次々と連れて行き、「道化師の娘」のなかの下男役を引き受けてくれたのだ（それまで下男役を演じていた役者がイタブーナで給料も仕事も抛り出して、食糧雑貨店のカウンターで働きだしたため）。

「セリフを言ってみろ、一言も間違えずに言ってみろっていわれたんだけどさ、そのときにや頭んなか真っ白になっちゃったよ。なもんで、踊りを見てもええなくって……」

その日の顛末とサーカスの不思議な世界について話すトゥイースカに、ガブリエラは拍手を送った。

「トゥイースカ、あんたもう少して本物の芸人になるのね。あした行くよ。一番前の列に陣取るからさ。アルミンダさんにも声かけて」と言っただけでしばらく考え込むと、「ナシブさんにも来てもらえるよう話してみる。パールは少し留守にすれば来られるから。あんたを見にさ……手が腫れるほど拍手するよ」

「母さんも見に来てくれることになってんだ。顔パスだから。ほくだっていつかサーカス団と一緒に出てくことになるかもしれないしね。ただ、あんなにピンボーなサーカス団だから……金の巡りが悪くてさ。ホテルに泊まらないで済むように、食べ物はずべて現地調達だし」

ガブリエラはサーカスにたいしてある明確な考えを持っていた。「サーカスならなんでもいいわ。崩れてバラバラになりそうなのもいい。サーカスの公演ほど素敵なものないもん。あたし大大好きよ。あした行くからね。拍手するからね。ナシブさんも連れてくから。まかせといて」

その晩、ナシブの帰宅はとても遅かった。明け方までパールの混雑が引かなかった。映画の上映時間が終わると、詩人アルジュ・パルメイラの周囲には大きな車座ができていた。著名な詩人は隊長の家で夕食を済ますと、さらに何軒かの家を訪問し、『黄玉』^{トバリス}を何冊か売った。イリエウスにすっかり魅了されていた。

港でちらりと目にしたサーカスは、あまりに惨めで競争相手にならなかった。ボールのお喋りは夜更けまで続き、詩人がかなりの酒豪であると判明した。カシャサを「神々の美酒」とか「カボクロ（白人とインディオの混血）のアブサン」と謳う。アリ・サントスが自作の詩を朗読し、詩神から賛辞を受けた。

「深遠なる靈感。精確なる形式」

ジョズエーも請われるままに自作の詩を朗読した。来訪者の颯感をわざと買うようなモダニズム詩を朗読したが、詩人はいささかもたじろがない。

「実に美しい。わたくしは未来派と意見を異にする者ではありませんが、ここに漲る才能には惜しみなく拍手喝采を送ります。なんたる迫力、なんたるイメーजी」

ジョズエーは兜を脱いだ。なにかに言ってもアルジレウは名の知れた人物なのだ。尊敬すべき作品群があり、世に認められた著作物がある。賛辞にたいしてお礼を言々と、ジョズエーは、もうひとつ、最近の作品を朗読させて欲しいと申し出た。朗読のあいだ、待ちかねたグローリアが一再ならず例の窓から顔を出し、ボールのようすをうかがっている。胸と尻が豊かに揺れ、裸の下腹部がうねり、罪深い接吻が彷徨い、抱擁が、交接が、信じがたい乱痴気騒ぎのたうつ詩節を、立ったまま朗読するジョズエー。その姿をグローリアは目にし、声を耳にするのだった。ナシブまでが拍手を送る。博士がテオドーロ・デ・カストロの名を挙げ、

アルジレウは杯を掲げた。

「テオドーロ・デ・カストロよ。おお偉大なるテオドーロよ！われ、オフエニージアの歌の前に頭を垂れ、汝の思い出の前に杯を傾ける」

みんなは杯を飲み干した。詩人がテオドーロの詩の一節を思い出し、あちこち変造しながら暗唱する。

美しきオフエニージアは窓辺にもたれ、

月明かりのもと、嗚咽する…

「泣き暮れる…」と博士と訂正する。

乾杯の合間にオフエニージアの物語を思い出すと、それに続いて今度はシニャジーニャとオズムンドの名前が浮かび上がり、逸話を微に入り細を穿って語りながら盛り上がった。ナシブの笑ったこと…隊長もその尽きることのないレパートリーを次々と披露する。厳かな詩人もまた話術が巧みだった。その朗々とよく響く声がひとたび哄笑を発すると、広場を揺らし、岩場まで行つてやっと消えるありさま。ポーカー室も大活躍だった。アマンシオ・レアル大佐はエゼキエル博士、シリア人マルーフ、リベリリーニョ、マヌエル・ダス・オンサスとがんがんやる。にぎやかな五人ポーカーだった。

ナシブは疲れて家に帰ってきた。死ぬほど眠かった。ベッドに

飛び込むと、いつもの夜のようにガブリエラが起こす。

「ナシブさん…遅かったのね…ねえ、事件のこと知ってる？」

ナシブはあくびをした。両目は上掛けのすき間から見える体に釘付けになっている。日々新たな秘密が立ち現れるあの体に。疲労と眠気の隙間から欲望の炎がちらつき始める。

「死にそうに眠いんだ。なんだい事件で」

ナシブは体を伸ばすと、ガブリエラの尻に足を乗せる。

「トゥイースカが芸人になるの」

「芸人って、いったい何の？」

「サーカスよ。役をもらったの…」

アラブ人の手が気怠そうにガブリエラの脚から尻へと登ってゆく。

「役をもらったって？ サーカスに？ なんの話をしているんだか分からない」

「どうしたら分かってもらえるのかなあ」ガブリエラはベッドに腰掛けた。これほどセンセーショナルなニュースなんてないのに。「トゥイースカが夕食後にやってきて話してくれたのよ…」ガブリエラはくすぐってナシブを起こそうとする。ついにナシブは目が覚めてしまった。

「欲しいのかい？」と好色そうに笑った。「じゃ、あげようか…」

ところがガブリエラがしたのはトゥイースカとサーカス話だった。一緒に見に行かないかとナシブを誘う。

「ナシブさん、あしたなんだけど、ドナ・アルミンダも連れて一緒に行けない？ トゥイースカ見に。ボールはほんのちよっとだけ留守にして」

「明日はだめだ。明日は二人で講演会に行くんだから」

「コウエ…なに？ ナシブさん」

「講演会だよ、ビエ。博士が来るんだ。詩人だよ。一行ごとに売れる詩を書く人だ。すごいぞ。だって、博士をふたつも持つてるんだから。学者先生。みんながその先生を囲んでたつてわけさ、今日は。議論したり、詩を朗読したり…最高だったぞ。先生が明日講演会するんだ、行政監督局で。チケット二枚買った。自分の分ときみの分と」

「でも、コウエンカイってどんなもののなの？」

ナシブは髭を撫で回した。

「ああそりゃな、いいもんだよ、ビエ」

「映画よりも？」

「映画よりもめずらしいな…」

「サーカスよりも？」

「比べるのは無理だ。サーカスは子ども向けだろ。出し物が良ければ見に行っても損はないが。でも、講演会はたまにしかやらないから」

「どんなところなの？ 音楽や踊りはあるの？」

「音楽、踊りか…」ナシブは笑う。「ビエ、きみには勉強しなく

ちやならないことがたくさんあるなあ。ないない、そんなもんな
いよ」

「じゃ、なんで映画やサーカスよりいいの？」

「いいかい、じゃよく聴くんだよ。人がひとりいる。詩人だ。

博士だ。その人がなにかを喋る」

「なにを？」

「なにかだ。今回は涙と郷愁について喋るらしい。その人が
喋って、みんなは聴く」

ガブリエラはびっくりして目を見ひらいた。

「その人が喋って、みんなは聴いて。で、そのあとは？」

「その後って？ それでお終いだよ。みんな拍手をする」

「それだけ？ それいじょうなんにもないの？」

「それだけだ。でもそこには喋ったことが残る」

「なにをしゃべるの？」

「まあいろいろと。よく分からないことを喋る人もいるけど、

そりゃ高級な証拠だ」

「ナシブさん…博士がしゃべって、みんなが聴いて…ねえナシ
ブさん、映画やサーカスよりいいっていうけど、なんなのかしら、
それ。そりゃナシブさんはいろんなこと知ってるけど、でもサー
カスよりいいなんてこと、ありえないよ」

「いいかい、ビエ。きみはもう使用人じゃないんだよ。奥様だ。
サアド夫人だ。そこををよく頭に叩き込んだかなくちゃい

けない。講演会がある。大博士がやってくる。イリエウスの上流
階級はみんな行く。だからぼくたちも行く。大事なことだ。素性
の卑しいサーカスなんかのために抛り出せないんだよ」

「だめなの？ ナシブさん。どうしても？ なんて？」

ガブリエラの不安そうな声がナシブの心を揺さぶった。優しく
撫でながら言う。

「どうしてもだめなんだよ、ビエ。みんなが何て言うか。あの
無教養な馬鹿ナシブは講演会をすっぱかしてくだらんサーカスに
行ったなんて言われてごらんよ。その後どうなると思う？ バー
ルの客がみんな講演会をつまみに話しているのに、ぼくひとりだ
けがサーカスの感想を喋るんだぞ」

「うんわかった…ナシブさんは行けないのね…ざんねん…かわ
いそうなトウイスカ。ナシブさんが来てくれればきつと喜ぶと
思ったのに。約束しちゃったけど。行けないの、わかった。トウ
イスカにあとでいっとく。じゃ、あたしがナシブさんの分も拍
手しとくね」と笑ってナシブをぎゅつと抱きしめる。

「なあ、ビエ。ちつとは覚えなないと。きみは奥さんだ。商売人
の妻として生きてゆかなきゃならないし、それにふさわしい行動
もしなくちゃいけない。そんじよそこの奥さん連とはわけが違
う。イリエウスの選り抜きたちが行くああいっく催しには行かない
わけにはいかないんだよ。少しずつでいいから覚えてくれ。きみ
は奥様なんだ」

「あたしもだめだってこと?」

「なにが?」

「明日のサーカス。あたし、アルミンダさんといくわ」

ナシブは愛撫していた手を引つ込めた。

「さっき言っただろ。ほくらふたり分のチケットを買ったって」

「だれかの話をみんなで聞くなんて、あたし好きじゃない。男がきれいな服着たり、女が息詰まらせそうになったりするの、男がきらい。サーカスの方がぜんぜんいいもん。ナシブさん、ほつといて。いつかべつるときに行くから」

「そうはいかないだよ、ジェ」と言つて愛撫を再開する。「講演会は毎日やるわけじゃないんだから…」

「サーカスだって…」

「講演会をすつぽかすわけには行かないんだよ。なぜきみがどこにも顔をださないんだってまわりからやいのやいの言われてんだ。みんなの噂になってさ。ちよつとまずいんだよ、これ」

「でもいききたいの、あたし。ボールにも、サーカスにも。通っても歩きたいし」

「行っちゃいけないところばかり行きたがるんだなあ。きみがしたがるのはそんなことばかりだ。ほくの奥さんだってこといつになつたら覚えてくれるんだい? ほくはきみと結婚した。だからきみは裕福で立派な商売人の妻だ。もう前みたいに…」

「怒つたの? ナシブさん。なんで? あたしなんにもしてな

いの…」

「きみをきちんとした奥様にしたいんだよ。上流社会のご婦人に。みんなに敬意を払ってもらえて、きちんと扱ってもらえる女性にしたいんだ。奥地からイリエウスに出てきた料理女で、昔は裸足で外を歩いて、ボールじゃあ敬意を払ってもらえなかったこと忘れてもらえるように。どう、分かったかい?」

「ナシブさん、あたし、上流社会のご婦人なんかになれない。あのひとたちにはウンザリだもん。あたしがもしお金だとしてつてせいぜい銅貨よ。とても金貨になんか。どうすりゃいいの?」

「徐々に身に付くさ。あの見栄っ張りの女どもだけどさ、あいつらもとはなんだと思う? ただの怠惰な田舎女よ。あの態度はあとから身につけたものにすぎないんだ」

長い沈黙があつた。眠気がふたたびナシブの体を領した。ガブリエラの上に置いていた手が滑り落ちる。

「サーカスにいかせて、ナシブさん。あしただけは…」

「さっき言っただろ。だめだ。ほくと一緒に講演会に行くんだから。もう蒸し返さないでくれ」

ナシブはベッドの上で寝返りを打つと、ガブリエラに背を向け、上掛けを引き寄せた。熱い体を感じられなくて寂しかった。ガブリエラの尻に脚を乗せて寝るのが習慣になつていたのである。でも、あんまり頑固にしていると不機嫌になることも教えなきゃ。社交界に出入ること、イリエウスの上流婦人としてふるまうこと、

おれの夫としての役目を果たすこと。それをこのさきいつまであの娘は拒絶するつもりだろう。なにかにいつても、おれはそんなじよそこらの馬の骨とは違うひとかどの人物だ。広場で一目置かれるナシブ・A・サアド氏だ。町で一番のボールを持ち、銀行にはお金もある。町の名士全員と知り合いだし、商業会議所の書記も務めている。今じゃあ発展クラブの理事会に推す声さえ出始めている。それなのにガブリエラときたら家のなかに閉じこもってばかりで、たまに外に出るといつてもドナ・アルミンダと映画を観に行くか、日曜日におれと外出するくらいで。これじゃ以前の暮らしとなにも変わってないじゃないか。「奴隷市場」で出会ったときと同じ、名字のないただのガブリエラだ。ガブリエラ・サアド夫人になってない。ボールに弁当箱を持って来ないようを説得するのがまた大騒ぎだ。涙まで流した。靴を履かせるのも地獄のような騒ぎだし。映画館では大声で喋るな。家政婦と仲良くしすぎるな。店の客に道で出会っても、以前みたいにはしたくない笑い方はするな。散歩に出たとき、耳にバラを挿すな。下品なサーカスのために講演会をすっぱかすな：

ガブリエラは気落ちして体を丸めた。なんでナシブさんは怒ってるのかしら？ ナシブは怒って背を向け、ガブリエラに触ろうともしない。ナシブの脚が乗っていないぶん尻が軽くて寂しい。愛撫もなければ、ベッドの上のお祭りもない。トゥウィースカが相談なしに役者の契約をむすんだからかしら。たしかにあの子

はボールの一部で、靴磨き箱はボールに陣取っているし、客の多い日には店の手伝いもしてくれる。いや、でも違う。トゥウィースカに怒ってるんじゃないわ。あたしに怒ってるんだ。あたしがサーカスにいくのをいやがってる。でもなんでだろう。博士の話をきかせるためにあたしを行政監督局の大広間に連れていこうとしてるんだわ。やだ、そんなの。サーカスだったら広がったあたしの足指でもらくに入る古靴でいけるけど、行政監督局だとシルクの服を着て、きゆうくつなあたらしい靴をはいていかなきゃなんないじゃない。お上品な人たちが集まって、あの女たちっていったら、あたしのこと頭のとっぺんから足の先までじろじろ眺めまわしてわらうんだから。きらいよ。ナシブさんはなんであんなにいろんなこといつてきたのかしら。あたしがボールにいくの好きじゃないみたい。あたしはこんなに好きなのに：やきもちやいてるんだわ。かわいい。もういかないわ。きめた。ナシブさんを怒らせたくないもん。気をつけなくちゃ。でもどうしておもしろくもないウンザリするようなことばかりやれっていうのかなあ。わからない。ナシブさんはいいい人よ。うん、それは間違いない。ぜったいに。なんで怒ってるんだろう。背中向けちゃって。サーカスいきたいって言ったからかしら。きみは奥さんだ、サアド夫人だっていつてたけど、違う。あたしはガブリエラだもん。上流社会なんてきらい。上流社会もいい男なら好きよ、もちろん。でも偉そうな場所の集まりはいや。みんなくそまじめで、可愛らし

いことは言わないし、だれも笑いかけてくれない。サーカスは好き。この世にあればどすてきなものはないな。トウイースカが役者で出るんじゃないに：行けなくなったら、つらくて死んじゃうかも：講演会を逃げ出してでも見にいこう。

不安な眠りに苛まれながらナシブは尻に足を乗せた。するとナシブはもう安心するだった。ガブリエラもいつもの重みを感じる。もうナシブさんを怒らせたくないと思った。

翌日、出がけにナシブが言った。

「夕方の食前酒の時間が終わったら帰ってきて夕食を食べるよ。それから講演会に行く準備をするから。すてきな服を着てお洒落したきみの姿が見たいな。みんながうらやむくらいに」

そう。ナシブはシルクの服、靴、帽子から手袋までも買い与えていた。いや、買い与え続けていたのである。金に糸目を付けず、本物の指輪やネックレスを。ナシブはガブリエラにトップクラスの金持ちマダムのような装いをさせたかった。ガブリエラの卑しい過去も、熱く燃える肉体の痕跡も、不器用さも、すべて消し去ることができるほどの装いを。ガブリエラは服を洋服ダンスに吊したまま、家では安いキャラコを着て、スリッパか裸足で歩き回っていた。ときおり猫の世話をしたり、台所に立ったりするだけだ。二人も使用人がいてなんになるのかしら？ 掃除女には辞めてもらった。だって、なんの役に立つの？ 洗濯をライムンダに任せることだけは了解した。ただ、それもトウイースカの母親

を助けるためだった。台所を手伝う娘はほとんど役に立たない。

ガブリエラはナシブを怒らせたくないかった。講演会は八時に始まる。サーカスも同じ時間である。ドナ・アルミンダによればこういう講演会はたいいてい一時間以上かからないらしい。それにトウイースカの出演は第二部に入ってからだ。第一部が見られないのはたしかにつらい。道化師。空中ブランコ。綱渡りの少女。でも、ナシブを怒らせたくない。悲しませたくない。

結婚式の日に着た青いスーツに身を包んだナシブに腕を借りて、足が痛くなる靴を履き王妃のように着飾ったガブリエラは、リエウスの通りを横切り、行政監督局への坂道をぎこちない足取りで上った。ナシブは友人や知人に出会うと立ち止まって挨拶をする。奥さまたちはガブリエラを頭のでっぺんから足の先まで舐めるように観察しては小声で囁きあい、意味ありげな笑みを交わしあう。ガブリエラは途方に暮れ、なんだか怖くなった。広間では大勢の男性が立ち、女性が奥で座席に腰を下ろしていた。ナシブはガブリエラを二列目の座席に連れて行って座らせると、トニコとニョー＝ガールとアリがお喋りしている横に行ってしまった。ガブリエラはどうしてよいかわからなかった。そばではデモーステネス先生の奥さんが、この暑いさなかに毛皮のコートを着てつんと取り澄まし、柄つき眼鏡を目に当てるとガブリエラをちらりと見て向き直る。検事の奥さんとおしゃべりの真っ最中だった。ガブリエラは周囲を眺めてみる。目が痛くなるほどの美しさだ。

頃合いを見計らって医師夫人の方を向き、大声で尋ねた。

「なんじに終わるんですか？」

周囲で笑い声が上がった。ガブリエラはますます気まずい気持ちになった。なんでナシブはこんなものを見せに連れてきたんだろう？ もうやだ、あたし。

「まだ始まっていませんよ」

糊のきいた胸当てをした大男が登場し、椅子が二脚並べられた壇上でエゼキエル博士の隣に腰掛けた。演壇には水入れとコップが置かれている。みんなが拍手をした。ナシブがガブリエラの隣に座る。エゼキエル博士は立ち上がり、咳払いすると、コップに水を満たした。

「ご来場の紳士淑女のみなさま。今日はイリエウスの知性曆にくつきりと赤い丸がつく日であります。わが町の教養ある市民が誇りと感激を以てお迎えいたしますのは、靈感溢れる詩才を誇り、すでに広く名の知れた詩人アルジレウ・パルメイラでございます。……」

という具合に話は続いた。人が話し、みんなが聴く。ガブリエラも聴いた。ときおり手を叩く人があると、ガブリエラも叩く。しかし、サーカスのことが頭から離れなかった。もう始まっているころだろう。幸い、いつも三十分は遅れる。結婚前に二度ほど、ドナ・アルミンダと「バルカン大サーカス」に行ったことがある。広告には八時開演となっているのに、八時半を回らないと始まら

なかった。ガブリエラは、広間の奥に置かれたタンスのように大きな時計を眺めていた。チクタク大きな音がするので、退屈のぎになる。エゼキエル博士の話は巧かったが、ガブリエラには言葉がはつきり聞き取れなかった。なんだかもやました音で、麻酔でも嗅がされたように眠くなってくる。チクタクいう音を刻みながら時計の針が進んで行つた。と、大きな拍手で居眠りが妨げられた。急ぎ込んでナシブに訊く。

「もう終わったの？」

「紹介がな。講演はこれからだ」

糊のきいた胸当てをした大男が、拍手のなか立ち上がる。ポケットから大量の紙を取りだし、テーブルの上に置くと、手で皺を伸ばした。エゼキエル博士のように、しかしもっと大きな声で咳払いをすると水を一口飲む。雷鳴のような声が広間を揺らした。

「イリエウスというこの花咲く庭の、その花壇の花たる麗しき乙女のみなさん。私の話耳を傾け手を叩いてくださるため、わざわざ家庭の聖なる奥座敷からおいで下さった奥さまがた。大西洋が洗う岸辺でイリエウスの文明を営々と築いていらつしやつたイリエウス紳士のみなさまがた……」

と話は続く。ときおり話を中断して水を飲み、咳払いをし、ハンカチで汗を拭う。なかなか終わらなかった。しじゅう詩が朗読される。広間を揺るがす雷鳴のような声がばらばら続いたかと思うと、声が和らぎ、詩の朗読に入るといふ塩梅。

「天に召された幼い息子の遺体をまゝで流す母親の涙。最も聖なる涙です。お聴きください。『母の涙、そは…』」

この人だとあんまり居眠りしなくてすみそうだけ。時計から目を離し、サーカスのことを忘れると、ガブリエラは詩の韻律に身を任せるように目を閉じる。と、突然、叫ぶような声とともに詩節が終わった。ガブリエラはびっくりしてナシブに尋ねる。

「もうすぐ終わるの？」

「しっ！」とナシブ。

でも、そのナシブ自身からして眠そうだ。ガブリエラが見ていてもよくわかる。講演者の博士に両目を釘付けにして一生懸命聴いているような顔をしているが、朗読する詩句が長くなると、まづげをパチパチさせ、やがて目を閉じてしまう。それでも、拍手が起きればみんなに合わせて手を叩き、隣にいるデモーステネス夫人にひとくさり何か言う。

「ものすごい才能ですね！」

ガブリエラは時計の針を見た。九時。九時十分。九時十五分。サーカスの第一部がそろそろ終わる時間だ。八時半に始まったとしても、終わるのは九時半ころだろう。幕間があるのは間違いないから、トゥイスカが出演する第二部にはぎりぎり到着できるんじゃないかしら。ただこの博士の話、まだちっとも終わる気配がない。ロシア人ジャコブは椅子で眠り込み、戸口の近くに座っていたミスターはとつくの昔に消えている。こちらは間に休憩を

取らず、最後まで続けてやる。ガブリエラはこんなに退屈なものにつきあったためしなかった。大男が水を飲む。ガブリエラも喉が渴いてきた。

「あたしのどがかわいた」

「しっ…」

「いつおわるの？」

なんとかという博士ったらさつきからずっと紙めくって、一枚にとんでもない時間かけて読んでるし。ナシブさんだっておもしろくなさそうで、居眠りさえしてるのに、なんでこんなところに来たのかしら。へんなの。なんで来たの。チケット買って、ボールほつたらかして、サーカスにも行かないで。ちっともわからない…それに、講演会に一緒に行かないでいいでしょっていったら、怒って背中向けちゃってさ。ほんとにへんよ。

拍手に次ぐ拍手がわき起こり、バラバラと椅子を押す音が聞こえ、みんなが演壇に押し掛けた。ナシブも立つ。それぞれが講演者に握手を求め、口々に称賛の言葉を発する。

「すばらしかった！ すごく良い！ なんとという想像力！ なんとという詩才！」

ナシブも一言。

「楽しかったです…」

ナシブは楽しんでないなかった。嘘をついていた。ナシブが楽しんでいればガブリエラにも分かる。居眠りだとしてたのに、

どうして褒めるの？ ナシブは知人たちとしきりに挨拶を交わしている。博士、^{ドクトル}ジョズエー氏、アリ氏、隊長がナシブを放さない。オルガを連れたトニコが帽子を取って、近づいてくる。

「ナシブ、今晚は。ガブリエラ、元氣かい？」オルガは微笑んでいるが、トニコはすっかり用心の塊だった。

このトニコという男は紛れもない美男子で、イリエウスじゅうで一番いい男だが、なかなか抜け目がなかった。ドナ・オルガの前では決して聖人君子面を崩さないが、ひとたび妻がいなくなる^{カミナリ}と蜜のように甘くトロトロになって、ガブリエラの傍にやってくる。トニコは「かわいい子ちゃん」と呼び、接吻を要求する。坂道あたりをうろうろし、部屋の窓にガブリエラの姿が見えるとその前で立ち止まる。結婚してからはガブリエラを名づけ子扱いだった。だってさ、ナシブに君との結婚を勧めたのはこのぼくだよ、とトニコはガブリエラに言うのだ。ボンボンを持ってきたり、視線を投げかけたり、手を握ったり。トニコはたしかに美男子、とびきりの美男子だった。

講演会から帰る人たちが通りを塞いでいた。ナシブは急いでいた。もうじきボールがいっぱいになる時間だ。ガブリエラもサーカスのことがあって気が急いでいる。ナシブはガブリエラを自宅まで送らず、ふたりは人気ない坂の途中で別れた。ナシブが角を曲がるとすぐに、ガブリエラは方向転換し、走るように歩き出した。ボールから姿を見咎められないようにするのはむずかしい。

かといって、ウニャンを経由する道は寂しくて通りたくない。浜辺を通ることにした。帰宅途中のムンデニーニョが立ち止まってガブリエラの姿を眺める。ボールを迂回して大急ぎで歩き、港に着いた。手にお金を握りしめていたが、入り口にだれもいなかった。勝手に扉を押して中へ入る。第二部は始まっていたが、トウイスカの姿は見えなかった。天井桟敷に腰掛け、舞台にじっと目を凝らす。さすがにこっちは見るかいがあるわ！ ついにトウイスカが現れた。奴隷の服を着て、なんて滑稽なの。ガブリエラは手を叩いて、思わず叫んだ。

「トウイスカ！」

ちびくろには聞こえなかった。悲しい物語だった。酷い妻が不幸な道化師を捨てたのだ。しかし、そこには滑稽なセリフも入っている。ガブリエラは笑って、トウイスカに拍手を送った。と、後ろで声がした。首筋に男の息がかかる。

「ここぞでなにしてんだい、ぼくの名づけ子ちゃん」

トニコが横に立っていた。

「トウイスカを見にきたの」

「ナシブに知れたら……」

「知らないし……知られたくもない。ナシブさんとってもいい人だもん」

「だいじょうぶ。話さないから」

なんて早く終わっちゃうの。こんなに楽しかったのに！

「送るよ…」

サーカスの出口でトニコは決断した。奸智に長けた男の決断だった。

「ウニャン経由で帰ろう。ボールのそばを通らないように丘の方を通って行こうよ」

ふたりは足早に歩いた。もう少し先に行くと電柱も灯りもなくなる。町一番のいい男トニコは囁きつづけた。傷ついた男の悩ましげな声で。

立候補者と潜水夫

その光景は数ヶ月間ほぼ毎日のように繰り返されていたが、それでも潜水夫の姿を見飽きる者はいなかった。こうして金属とガラスでできた服を着ていると、さながら河口に降り立った異星人である。潜水夫は川が海と合流する地点に潜水するのだった。当初は、作業を間近で見ようと町全体が一塊りになってウニャン岬に移動してきていた。潜水、唸りをあげるポンプ、渦巻き、湧き上がる泡。歓声をあげながらひとつひとつに見入る。店員は売り台を、労働者はカカオ袋を、料理女は台所を、お針子は針仕事を、ナシブはボールを抛り出して見に来た。なかにはボートを借りてタグボートの周りをウロウロする者までいた。真っ赤な顔をした独身の主任技師（ムンディーニョ）はやかかいを避けるため大臣に

頼んで独身男を送り込んでもらっていた）が大声で指令を与えていた。

ドナ・アルミンダは潜水夫の怪物じみた姿を目の前にして興奮する。

「こんなもんよく考え出したよねえ。交霊会で死んだ夫に話をしても、嘘つき呼ばわりされるかも。かわいそうに、あのひと。これ見ないうち死んじゃってさ」

「嘘だと思ってたわ。まさか本当だなんて。海の底に降りるって…ちよつと信じられなかったから」とガブリエラが告白する。

日を追って酷暑が募るなか、ウニャン岬は押すな押すなの人混みだった。収穫は終わりを迎えていた。カカオは乾燥用箱や室のなかで乾燥し、輸業者の倉庫やバイアーナ船、沿岸航路船、ロイドの船の船倉に積み上げられている。そうした船が港を出入りするたびにタグボートと浚渫船が河口から離れてゆくが、またすぐに戻ってきて、急ピッチで作業が進められる。潜水夫はこの時季最もセンサーシヨナルな存在だった。

ガブリエラはドナ・アルミンダとちびくろトウイスカに自説を開陳する。

「海底は陸上よりもきれいなんだってね。見てみたいな、なんでもあるっていうから。征服が丘よりも大きな丘もあるし、いろんな色の魚もいるし、魚が食べる牧場の草もあるし。花畑なんか、行政監督局の庭よりもきれいなんだって。木があつて、植物

があつて、人のいない町まであつて。沈んだ蒸気船はもちろんだけど」

ちびくろトウイスカが信じられないという風情で言う。

「ここには砂しかないよ。それとジャケツイバラと」

「ばかねえ。あたしは海のなかの話をしてんの。深いところの。若い男の子が教えてくれたんだ。学生さん。本と暮らしているみたい。いろんなこと知ってたよ。使用人がいる家でさ、都会の。いろいろ教えてくれてさ」と、思い出しながら微笑む。

「なんたる偶然！」とドナ・アルミンダが叫んだ。「夢見たんだ。ナシブさんの家の戸を叩く人がいてさ、その人が手に扇子もつてんのよ。その人、扇子で顔かくしながらさくくのさ。ガブリエラ、お前はどこにいるんだって」

「神よ、ドナ・アルミンダをお助け下さい！ それじゃまるで幽霊じゃない」

イリエウス全体が港口の作業のなかで暮らしていた。潜水夫の他にも、浚渫船に据え付けられた機械が人々の感嘆と驚きを引き起こした。機械は砂を取り除き、港口の底を掘削し、水路を広げる。その地震のような音は、まるで、町の暮らしそのものを永遠にひっくり返してしまふそうだった。

工事の一行がやってきただけで、すでに政治の力関係に変化が生じていた。浚渫船、タグボート、掘削機、技師、潜水夫、専門家。これら的大打撃によって、すでにかなり揺らいでいたラミ

ロ・バストス大佐の威信は崩壊寸前までに追いつめられたのである。隊長カピタンの言いぐさを借りれば、砂地をひと噛みするごとに、ラミール大佐の票は十票ずつ減ってゆく。ナシブとガブリエラが結婚式を挙げたあの日、黄昏のなかをタグボートがやってきて以来、政治抗争はますます先鋭化し、激化していった。あの晩はお祭り騒ぎだった。ムンディーニョのシンパは勝利の凱歌をあげ、ラミール・バストスのシンパは脅しの言葉を呟いていた。キャバレーでは殴り合いの喧嘩が起きた。ロイリーニョと用心棒ジャグレンツが入ってきて電灯に発砲したさい、尻でかドラが大腿部に弾丸を受けている。状況からすると、主任技師をイリエウスから追い払うためにぶん殴るつもりが、失敗したらしい。赤ら顔の技師は、大混乱のなか、隊長カピタンとリベリーニョがどうにか救出しおうせた。もつとも、技師自身は騒動がまんざら嫌いでもなかったようで、相手の頭でウイスキーの瓶をたたき割っている。当のロイリーニョによれば、計画は最後の詰めが甘かったらしい。

翌日の『日刊イリエウス』はこの事件を大々的に糾弾した。曰く、すでにして敗北を喫していた土地の古参のリーダーたちは、二・三十年前に終わつたはずの手段にまたもや訴えかけてきた。これでやつらの正体が暴かれた。結局、用心棒ジャグレンツのリーダーでしかなかったのだ。しかし、発展の促進に飛び抜けて功のあったムンディーニョ・メンデス・ファルカンのおかげで、そして、権力に恋々とする盗賊団の愛郷心のかけらもない抗議の声をものともせ

ず、政府が港口に水路を掘削するため送ってきた優秀な技師と専門家を脅せるなどと考えるなら、それは大間違いだ。そう、そのとおり。だれひとり脅すことなどできやしない。カカオ地域の成長を支持する者は、このような抗争を嫌うが、とはいえ、敵のきかない手口に阻まれようと、状況を見計らって反撃に打って出る力はある。この先どんな技師がやってきてもイリエウスから追いつくことなどできないだろう。いかなる口実も脅迫も役に立たないはずだ。以上、この日の『日刊イリエウス』はとりわけセンセーショナルであった。

アルティーノ・ブランドン大佐とリベリーニョ大佐の農場から用心棒たちが出てきた。しばらくのあいだ、街を歩き回る技師たちには奇妙なボディー・ガードが付いていた。片目の潰れた悪名高いロイリーニョがアマンシオ・レアルとメルク・タヴァーレスの用心棒部隊を指揮する姿も見られた。部隊にはファグンデスという名の黒人もいる。しかし、娼家や路地の暗がりでの乱闘を除けば、結局たいした事件は起こらなかった。工事は粛々と進められ、周囲はタグボートや浚渫船で働く人々に相変わらず敬意のこもった視線を投げ続けるのだった。

ムンデイーニョを支持する大農場主はますます増えてゆき、アルティーノ大佐の予測は現実のものになった。ラミーロ・バストスは孤立無援になり始めていた。状況に気づいているのは息子と友人たちだけ。頼みの綱は州政府の協力である。もし敵陣営が勝

利したとしても州政府がそれを認めなければよい。ラミーロ大佐の家で、ふたりの息子（アルフレード博士はイリエウスに居た）とふたりの腹心、すなわちアマンシオとメルクが話し合っていたのはそんなことだった。古いやり方で選挙を牛耳るしかない。投票箱と選挙管理委員会と名簿を押さえる。要するに選挙をコントロールするんだ。内陸部はこのやり方で大丈夫だろう。ただ、都市部のイリエウスとイタブーナでこの方法を取るとすれば、なにがしかのリスクはやむを得まい。だが、州知事は協力を惜しまないと明言してくれた、とアルフレードは語る。たとえ選挙で完勝したとしても、ムンデイーニョとやつの一派はぜったいに承認しないつもりだ、と。州で最も豊かで繁栄したカカオ地域を、俺たちにたてつくムンデイーニョのような野心家に明け渡すもんか。許さんぞ、そんな馬鹿げたこと。

杖の金製の握りにあごをもたせかけながら老大佐は耳を傾けていた。光の失せた目をしきりにしばたかせている。それでは本物の勝利にならない。いや、敗北以下だ。おれがそんなものを必要としたためしなんかいちどだつてなかったじゃないか。いつだつて投票箱の投入口で勝利は決まっていた。票で勝利してきたんだ。いざ政権の承認というときになって敵を追い落とすなんて、そんな必要がこれまで一度としてあったか。それなのに、アルフレードとトニコ、アマンシオとメルクは平気な顔をしてそんな話をしている。おれがどんな屈辱を被るか知りもせずに。

「そんな必要はない。票で勝つー!」

ムンデイーニョが下院議員に立候補していることがせめてもの救いだった。行政長官の座を争うとしたらリスクはもつと大きかっただろう。ムンデイーニョは人気も威信も高い。イリエウスの圧倒的多数とまではいかずとも、大半があつた男に投票するだろう。勝利はほぼ間違いない。

「投票用紙を操作するのはここも以前ほど簡単じゃないしな」とメルク・タヴァーレスも認める。

とはいえ下院議員の選挙となると、ムンデイーニョも地域全体の票に頼らざるを得ない。七区にはイリエウスだけではなく、ベルモンテ、イタブーナ、カナヴィエイラス、ウナが含まれ、カカロ地域の住民はここから議員をふたり選出する。そのうちのひとりにはイタブーナとイリエウスとウナから選出される。ただ、ウナの重要性は低く、票数もたかが知れている。一方、イタブーナは、昨今イリエウスと同じくらい重要性が高い。しかも、そこで反対勢力も抱え込まずに思う存分支配権を揮っているアリストーテレス・ピレス大佐が政治的なキャリアを積めたのはラミーロ・バストス大佐のおかげである。アリストーテレス・ピレス大佐を旧タボカス地区の警察副署長にしたのはだれだろう、ラミーロだったのだ。

「アリストーテレスはおれの命令通りに投票するはずだ」

しかも、下院議員は市町村レベルの政治に左右されず、首都の

候補者以外、選挙などたんなる儀式にすぎなかった。下院議員は州知事と連邦政府の妥協の産物。イリエウスとイタブーナから選出された現職の下院議員(もうひとりにはベルモンテとカナヴィエイラスから選出されている)など、最後の選挙が終わってから一度しか地元姿を見せていない。リオ在住の医師で、上院議員の後盾があつたからである。この点でムンデイーニョが成功する可能性はゼロだった。かりにイリエウスで勝つたとしても、イタブーナとウナでは負けるだろうし、内陸部の市町村では選挙に不正操作もできる。

「あいつもこれで一巻の終わりだな」とアマンシオが結論を口にする。

「しかし完敗させる必要がある。二度と立ち直れないようにな。まずはイリエウスからだ。ぶざまな敗北を味わわせてやるぞ」とラミーロが息巻く。

隊長は行政長官に、エゼキエル・プラードは州議会議員に、それぞれ立候補を予定していた。ラミーロは弁護士立候補をすっかりばかにしている。アルフレードが選ばれることは間違いない。弁護や交渉、祭りの日の演説にかけてならエゼキエルもなにがしかの取り柄はあるだろう。だが、それをさつ引けば、あいつの評判はさんざんだ。酒ばかり飲んどるし、女がらみの醜聞は絶えない。そのうえ選挙区の票をすべて掻き集めなければならない点ではムンデイーニョと同じだ。

「まったく危なげないな」とアマンシオが追認する。

「ムンデイーニョに日和見を学んでもらう良い機会だ……」

一方、隊長カピタンの運命はイリエウスの票だけで決まる。手強い相手だ。ラミーロ自らが身を以て知っている。農村部で叩き潰す必要がある。都市部ではやつが勝つかもわからないからな。隊長カピタンの父親、すなわち、バストス一族に潰されたカズズイーニャは町で伝説と化した人物であった。善き人にして模範的な行政官という伝説である。最初の舗装道路を作ったのはカズズイーニャで、その道路は今でもそのまま「舗道パヴェレ・ベドス」と呼ばれている。最初の広場と最初の花壇を造ったのもカズジーニャ。最後までバダロー一族に熱狂的な忠誠を捧げたカズジーニャは、バストス一族との出口なき闘争に持てるものすべてを注ぎ込んだ。その名は善意と献身の模範としていまも引き合いに出されている。隊長カピタンは父親の思いつく出を包むこの伝説から利益を得ていたばかりではなかった。自分自身も周囲から大いに共感を持たれていた。イリエウスで生まれ、ずっと中心街に暮らしてきた隊長カピタンは文明の香気を湛えていた。演ずれば拍手喝采を浴びる名演説家で、絶大な人気を博している。父親からはロマンチックで英雄的な身振りに対する嗜好を受け継いでいた。

「危険な候補者だな……」とトニコが言う。

「野心家でもあり、みんなからも良い目でも見られている」とメルクが話を合わせる。

「全てはこちらの候補者選びにかかっているな」

ラミーロ・バストスはメルクの名を挙げたが、メルクはすでに市参事会議長ではなかったか。ラミーロの代父であるアマンシオは政治的ポストをいっさい受け入れないので、話を持ちかけることはしなかった。そのメルクも辞退する。

「ありがたいが、わしが受けるつもりはない。大農場主じゃまずいと思うんだが……」

「なぜ？」

「町の人間はもつと学のある者を望みますよ。大農場主は公務にたずさわる時間がないと巷じゃ言われています。それに理解力があまりないってね。時間はたしかにないが……」

「なるほどその通りだ」とトニコが口をはさむ。「みんなもつと有能な行政長官を望んでいるからな。町の人間でなきゃだめだ」「だれがいる？」

「トニコはどうだい」とアマンシオが水を向ける。

「おれかい？ おいおいよしてくれ。生まれつき不向きだよ。おれが政治に口つつむのはおやじがいるからさ。行政長官なんてまっぴら。隅でちっちゃくなってる方がいい」

ラミーロは肩をそびやかした。そんなアイデアなどわざわざ検討してみるまでもない。トニコが行政長官だなんて……役所を娼婦でいっぱいにするのがオチだ。

「おれが思いつくのはふたり」とラミーロが言う。「マウリーシ

オ先生とデモーステネス先生だ。このふたりだけだ。他は思い浮かばない」

「デモーステネス先生がここに来たのは四年前だ。ムンデニーヨよりも遅い。隊長に張り合える玉じゃない」とアマンシオは反対する。

「それでもマウリーシオ先生の方が良いと思う。有名な医者だし、病院の建設を準備しているし。マウリーシオには敵が多すぎる」

ふたりの名前を並べてどちらが有利でどちらが不利かあれこれ議論した結果、結局弁護士に落ち着いた。天下周知の守銭奴で、どはずれて潔癖かつ偽善的、狂信的で神父べつたりとくれば、信仰心のうすいこの土地では人気がなかったが、デモーステネス先生も不人気な点では選ぶところがなかった。著名な医者ではあったが、これほど自惚れ屋で、尊大で、偏見に満ちた人間もない。殿様のように振る舞っていたのである。

「たしかに医者としては優秀だ。ただ、煮ても焼いても喰えないお殿様だよ」とアマンシオは地域の意見を代弁する。「マウリーシオは敵も多いが、味方も多い。演説もうまい」

「裏切らないし」ラミーロは最近、忠誠心を高く評価していた。「それでも負けるかもしれない」

「おれはどうしても勝ちたい。しかもこのイリエウスで。州政府に頼んで切ってもらうんなら、それがだれだろうと気にくわ

ん。おれは勝ちたいんだ」ラミーロはおもちゃが欲しくてだだをこねる子どものようなだった。「ひとさまにすがらなきゃいけないようになったら、すべて終わりにする」

「ラミーロさん、なるほどあんたの言う通りだ」とアマンシオが言う。「ただ、そのためには怖がってもらう人がちよいとばかり要る。町に手下の者を送り込もう」

「必要とあらばどんな手でも打つ。その代わり、選挙ではぜったいに負けたくない」

三人は市参事会選挙の立候補者名簿を検討した。伝統的に反対派が参事を選んでいった。この参事はこれまた伝統的に老オノラートが選ばれていたが、反対派といっても名ばかりで、老オノラートはラミーロに恩を負っていて、時に、ラミーロの同僚のだれよりも州政府寄りになることさえあった。

「今回の名簿には、オノラートの名前が見当たらないな」

「博士が選ばれることはほぼ間違いない」

「まあ放っておけ。すぐれた男だ。ただ、ひとりきりじゃ反対派にはなれんだろう」

ラミーロ大佐は博士に弱かった。博士の学識やイリエウスの歴史にたいする造詣の深さに感服していたし、過去を語り、アーヴィラの有為転変を物語る博士に耳を傾けるのが好きだった。あの男は参事会に名誉を添えるにちがいない。そして最後はオノラートと同じで、他の人たちと同じ投票行動を取るだろう。選挙

結果の予想は芳しくなかった。ラミーロの居間には黒い影が忍び寄っている。しかし、ラミーロはこうした状況あつてもなお、寛大にも反対派に議席をひとつ、敵方の最高貴顕に譲ることができる鷹揚な大人であつた。

勝利は約束する、とアマンシオが言う。

「ラミーロさん、任せてくれ。神さまがおれを生かしてくれているかぎり、イリエウスであんたを巷の笑ひ者になんかせさない。やつらに勝利の蜜は味わせないから。おれたちに任せてくれ。おれとメルクに」

この同じ時間帯、夏の猛暑のなかをムンデイーニョの友人たちは走り回っていた。リベイリーニョは一カ所に腰を落ち着ける暇もなくあちこち駆け回り、選挙区全域をくまなく回ろうという勢いだつた。隊長もイタブーナ、ピランジ、アーグア・ブレータに赴く。帰ってくると、イタブーナにはすぐに行つた方が良くと勧めた。

「イタブーナじゃ盲人さえほくらに投票してくれないぞ」

「なぜだ」

「きみも聞いたことがあるだろう。ほら、人気が高い政治家の話。実在したんだよ、そいつが。イタブーナのアリストーテレスだ。大農場主から乞食まですべての人心を掌握している」

ムンデイーニョは隣町で大歓迎を受けながらも、それが間違いないことを確認した。知らせてあつた到着日には鉄道駅にさまざ

まな人たちが迎えにきていたが、その人たちはすっかり肩すかしを食らつた。ムンデイーニョが新しい自家用車に乗ってやつてきたからである。人目を引く黒い車で、それが通りを走り抜けると人々は競って窓から覗く。顧客たちはムンデイーニョを盛大な昼食や夕食に招待し、散歩、キャバレー、クラブ・グラピウーナ、果ては教会にまで連れ出した。しかし、政治の話はいっさい出なかつた。ムンデイーニョが綱領を口にする、顧客たちはまったく同感だと言う。

「もしアリストーテレスに義理がなければ、よろこんでムンデイーニョさんに投票するところですが」

忌々しいことに、みんながみんなアリストーテレスに義理を感じていたのである。滞在二日目に大佐本人がホテルにムンデイーニョを訪ねてきた。あいにくムンデイーニョが不在だったため、書き置きして帰つたが、そこには輸出業者に宛てて、行政監督局にコーヒーを飲みにいらいっしやいませんか、と愛想の良い言葉が書き連ねてあつた。

アリストーテレス・ピレス大佐はで痘痕のあるカボクロ（白人とインディオの混血）で、おしゃべり好きで、よく笑う男だつた。千五百アロバの生産高がある中規模の農場を所有し、イタブーナでだれもが認める権力者である。天性の行政官で、政治好きが血のなかに溶け込んでいる。警察副署長に任命されて以来、大佐と町の主導権を奪い合おうという人物は大農場主のなかにさえない

かった。

バダロー一族の陣営から出発したが、セケイロ・グランデの森で倒れた旧いボスの政治的没落をだれよりも早く察知し、見捨てるのが卑劣な行為になるまえにこの一族のもとを離れた。にもかかわらず、バダロー一族は大佐を殺そうとした。大佐は危機一髪のところ銃弾を免れた。一緒に居た人物に当たったのである。この出来事に恩義を感じたバストス一族は、アリストーテレス一族が所有していた開墾地付近の小村だった当時のタボカスの、その警察副署長に大佐を任命した。その後、惨めな集落は町へと変身し始める。

数年後、大佐はタボカス地域独立の旗を掲げ、タボカスをイリエウスから分離させてイタブーナの町を立ち上げた。地域住民はみなこのアイデアに賛同したが、ラミーロ・バストス大佐はこれを聞いて激昂した。両大佐の決裂はほぼこれを機に起きたといつてよい。イリエウスを切断し、巨大な土地をおれから奪ろうというあのアリストーテレスという男、あいつはいったい何者なんだ？ とラミーロが叫ぶ。アリストーテレスはかつてないほどの謙虚さと誠実さでラミーロの説得に努めた。バイーアでは、ラミーロが同意しないかぎり政令を認めるつもりはないことを州知事がアリストーテレスに伝えていた。状況は困難だが、あと少しでうまくゆく。ラミーロさん、あなたに失うものはありますか？ とアリストーテレスが訊く。新しい町の成長を押し止めることは

できません。好むと好まざるとにかかわらず、それはいずれやってきます。抗うよりも、積極的な後援者になつたらいかがですか？ わたしの方では、警察副署長としても行政長官としても、もっぱらあなたを支えようと努めてきたではありませんか。あなたの支配している町がひとつではなく、ふたつであること。それだけがわたしたちふたりの違いでしょう。最後にはアリストーテレスのこうした説得を聞き入れ、ラミーロは新しい行政監督局の設立記念パーティーに姿を見せた。一方、アリストーテレスも約束を果たした。バストス大佐から味わわされた屈辱、苦みを胸の裡に秘めたまま、大佐を支え続けたのである。にもかかわらず、ラミーロは、まだタボカスの若い警察副署長でもあるかのようにアリストーテレスを扱い続けた。

アイデアと進取の気性に富んだアリストーテレスは、イタブーナを繁栄させるべく仕事に一身を捧げた。用心棒ジャクソンを一扫し、中心地区の道路を舗装したが、広場や花壇の造営と町の美化だけに力を集中するようなことはしなかった。その代わりに、きれいな街灯や最良の下水施設を設置し、集落を結ぶ道を通し、カカオの木

の剪定のために専門家を招き、カカオ生産者の共同組合を設立し、商業を発展させるべく便宜を図った。周縁地域への目配せを怠らず、セルタン地帯にまで伸びる広大な内陸部の集約点へとこの若い都市を変身させたのである。

ムンデイーニョは行政監督局でアリストーテレスと会った。町

の二点を結ぶ新しい橋の計画を検討しているところで、輸出業者の来訪を待ちわびていたらしい。コーヒーを持ってこさせた。

「大佐、あなたの町にお祝いを言わせていただきたくて参りました。大佐のご活躍ぶりには目をみはるものがあります。政治の話もしたいと思ひまして。失礼になるといけませんから、政治の話がお気に召さないばあいは率直におっしゃってください。お祝いのことはもう言いましたね」

「ムンデイーニヨさん、政治の話がなぜいけないんです？ わたしにとつて政治は酒の代わりです。ムンデイーニヨさん、わたしね、もし政治家になっていなければ、いまごろ金持ちだったと思いますよ。なにしろ政治にずいぶんと金をつぎ込んできましたから。不満はありません。これが好きなんですから。わたしの弱みですな。子どももないし、遊びもしなけりや飲みもしない：女性については、そりやたまには人に言えないようなこともあります。すが」と、人好きのする笑みを浮かべる。「ただ、政治とはわたしにとつて行政です。他の人にとつては交渉や威信ということになるでしょうが、わたしにとつては違う。お分かりになつていただけたらと思いますが」

「よく分かります。イタブーナがその最良の証拠ですね」

「イタブーナが大きくなるところを見てみると心が満たされるんです。いずれイリエウスを越えますからね、ムンデイーニヨさん。いや、町の話じゃなくて。だって、イリエウスは港町ですか

ら。自治行政の話です。イリエウスは暮らしやすいが、ここは働かやすい」

「みなさん大佐の噂ばかりですよ。全員から尊敬され、評価されていらつしやる。敵がいらないんですね」

「まったくいいわけじゃありません。半ダースくらいは：よくお捜しになればわたしを好いていない人間にも出会えますよ。ただ、なぜ好いてくれないのか、その理由は言ってくれませんが。ムンデイーニヨさんのすぐ後ろまで来ているはずですよ。まだそこらには行つてませんか？」

「いや、来しました。わたしがその人たちに何と言つたか、お分かりになりますか？ わたしに投票したい人は投票なされればいい。だからといって、わたしがアリストーテレス大佐にたいする闘いに手を貸す義理はない。そう言いました。イタブーナは行政サービスがよく行き届いている、と」

「実はそのこと、すでに存じ上げておりました：すぐあとで耳にいたしましたから：その節はありがとうございました」と言つて、アリストーテレスはムンデイーニヨに微笑みかけた。カボク口男の大きな顔には満面の誠意が輝いていた。「わたしの方でもムンデイーニヨさんのご活躍を注目して追つてまいりました。いや、お見事です。港口の工事はいつ終了する予定ですか？」

「数ヶ月後には終わるでしょう。そうすればカカオの直接輸出が始まります。できるだけ早く工事を進めておりますが、やるこ

とが多くて」

「このところずっと港口の工事で話題持ちきりですよ。ムンディーニヨさんもその勢いに乗って選挙でお勝ちになるかもしれません。ただ、ちょっと調べてみたんですが、ひとつ申し上げたいことがございます。本当の解決は、マリヤードの港ですよ。港口の浚渫ではありません。どんなに浚渫しても砂はまた戻ってきます。真の解決策はマリヤードに新しいイリエウスの港を造ることです」

アリストーテレスはムンディーニヨがてつきり反論するものと思っていた。しかしそれは間違いだった。

「わたしもまったくそのとおりだと思います。最終的な解決はマリヤードの港です。しかし、州政府にそれを造るつもりがあるとお考えですか？ それに、もし工事が始まったところ、開港するまでにいったい何年待てばいいのか。大佐、マリヤードの港は難攻不落の砦ですよ。そしてその間にもカカオはバイーアの港から輸出され続けるわけです。その輸送費用をだれが払うのか。われわれ輸出業者とみなさん大農場主です。港口の改良を最終的な解決策と考えているわけではないことは、どうかご理解ください。わたしの敵は港のことをあげつらいますが、実はわたしもあの人たちと同じ考えであることがよく分かっていないのです。ただ、新しい港が存在しないのであれば、当面、港口を使えるようにした方がよい。直接輸出ができるのももうすぐです。で

も、港口の工事が終わったらすぐ、新しい港を造る闘いを始めます。それからもうひとつ。浚渫船はこのさきもずっとイリエウスに停泊して、港口の浚渫をしてくれることになっています」

「なるほど」と言って、アリストーテレスはもの思いに沈んだ。顔に笑みはない。

「もうひとつだけ大佐にお知らせしておきたいことがあります。わたしがこうして政治の世界に足をつこんだのも、実は、大佐と同じ動機なのです」

「イリエウスにとつてはチャンスですな。ムンディーニヨさんがイタブーナのためにも事業を広げてくださらなかったのは残念です。定期バスの件は別として」

「イリエウスはたしかにわたしのホームグラウンドです。でも、選挙結果にかかわらず、わたしは事業を周囲に、とくにイタブーナに広げたい。今回わたしがここに来たのは、輸出会社の支店を開けないか探るのが目的のひとつなんです。やってみたいんです」

ふたりはコーヒーを飲んだ。アリストーテレスはたった今耳にしたニュースもコーヒーと一緒に味わった。

「それはすばらしい。イタブーナには企業家が必要です」

「さてと、これで話すべきことは話しました。わたしからお伝えすべきことは以上です。票のお願いに來たわけではありませんから。大佐がラミール・バストス大佐と親しい仲であることはわ

たしも存じ上げております。お目にかかれてよかった」

「なぜそんなに急いでお帰りに？ いらしたばかりだというのに……わたしが老ラミーロと親しい仲だとおっしゃいましたが、それはどういう意味でしょうか？」

「いやあ、知らない人はおりませんよ……イリエウスでは、大佐の票が下院議員と州議会議員の選挙を保障しているってもつばらの噂ですから。ヴィートル・メーロ博士しかり、アルフレード・バストス博士しかり」

アリストーテレスは、それがまるでとてつもなく可笑しい出来事であるかのように笑い始めた。

「ムンデイーニョさん、もう少々お時間いただいてよろしいですか？ これまでの経緯をお話しさせていただきます。聞いて損はないと思いますよ」

大声で職員を呼ぶと、コーヒーのお代わりを頼む。

「下院議員のそのヴィートル先生とやらにはまったく会ったことさえありません。知事が任命し、大佐が了承する。わたしの入り込めるすきなどあるでしょうか？ したくても票を投じることが出来る人物なんておりません。イリエウスとイタブーナの対立はカズーザ氏の死とともに終わりました。いやじつを申せば、そのかんとか先生、選挙の後いちどこにお見えになったことがあります。大急ぎで。町をひと目見るともう眉根に皺を寄せてね。ひどい町だと思ったんじゃないでしょうか。訊いてきましたよ。

花壇も造らず、あれも造らず、これも造らず、あんたはいったい何をしているんだ、と。わたしは造園業者じゃございません、行政長官です、と答えました。ご不満のようでした。実を言えば、あの先生の気に入ったものはなにひとつなかった。道も、下水工事、なにひとつ見ようとさえしませんでした。時間がなかったんですよ。その後わたしはあれこれと予算請求項目を送りました。山ほどの手紙を書きました。あの先生はそれを予算に組み込んでくれたでしょうか？ なにひとつ組み込んでくれなかった。手紙に返事をくれたでしょうか？ 一通もくれませんでした。たいへんありがたいことに、年末にクリスマスカードをいただきましたが。聞くところによると、今度も立候補しているそうじゃないですか。イタブーナでは一票も取れないでしょうね」

ムンデイーニョがなにか言おうとしたが、大佐は笑って先を続けた。

「そこへゆくと、ラミーロ大佐はあの人なりに誠実です。二十年以上前、わたしをこの警察副署長にしてくれたのもたしかにあの人です。自分のお陰で今のあいつがあるんだと吹聴して回ってますが。でも、ほんとうのことをお教えしましょうか？ ラミーロ大佐がバダロー一族を倒せたのは、わたしがラミーロ側についたからです。それから、わたしがバダロー一族から離れたのは、一族が負けそうだったからだというもつばらの噂です。しかし、わたしが離れたのは一族の絶頂期、まさに勝者の時期だった

たのです。たしかにその後凋落しました。しかしわたしが捨てた理由は、あの人たちにもはやリーダーシップを取ることができないと判断したからです。政治とはあの人たちにとってただ土地を拡大することに他ならなかった。当時のラミール大佐はちょうど、今日の大佐にとってムンデイーニョさんのような位置取りになります」

「ということはつまり……」

「もう少しご辛抱を。あと少しで終わります。ラミール大佐はイタブーナの分離独立に同意なさいました。もし反対したら事が長引き、州政府が混乱しそうだったからです。そのためわたしはラミール大佐を支持してきました。しかしラミール大佐の方ではわたしに果たすべき恩義があったからだと考えています。ムンデイーニョさんがイリエウスのさまざなことに関わりだしてから、わたしは注目しております。ムンデイーニョさんが昨日こちらに到着したとき、わたしは思いましたよ。あの愚連隊どもはきつとやってくる。ムンデイーニョさんがどうするか見てやろう。これは決定的な証明になるぞ」と言って気さくに笑う。「ムンデイーニョ・ファルカンさん。もしわたしの票が欲しいのなら、差し上げます。見返りは求めません。これは取引じゃありませんから。ただ、ひとつだけ。イタブーナにも目をかけてください。カカオ地域は一体です。内陸のこの見捨てられた地域に目をかけてください」

ムンデイーニョは驚いた。あまりに驚いたため、出てきた言葉はこれだけだった。

「大佐、一緒にいろいろやりましょう。大きなことを」

「今日の話はまだ胸のなかにしまっておいてください。選挙が近くなったら、わたしの方から公表しますから」

しかしムンデイーニョは、賢明さと慎重さが命じるその日まで待ち続けることができなかった。そのため、数日後、州政府派の立候補者名簿を手渡すからとラミール大佐がアリストーテレスをイリエウスに呼びつけることになった。アリストーテレスは最も力のある友人たちを集めて話し合うと、長距離バスに乗ってイリエウスへと向かった。

ラミール大佐は、背もたれの高い椅子が置かれた例の客間にアリストーテレスを招き入れず、ただ複数の名前が書かれた紙を手渡した。「下院議員、ヴィートル・メーロ博士」と書かれ、その下には名前が列挙されている。アリストーテレスは音でも区切るようにゆつくり読み、紙を返した。

「大佐、このヴィートル博士には投票いたしません。たとえこの世の終わりが来ようとも。あの人はなんの役にも立たない。あんなに頼んだのに、なにひとつやってくれませんでした」

ラミールは、だだをこねる子どもを叱るような権高なしやべり方で言った。

「なぜあんたはその頼みをおれのところにもって来なかった？」

おれが間に立てばあいつだって聞いたはずだ。あんたが悪い。選挙の件だが、あれは政府御用達の候補者だ。われわれとしてはあれを当選させる。州知事との約束をはたさなきゃならん」

「約束したのは知事であって、わたしじゃありません」

「あんた何を言ってるんだ？」

「大佐、すでに申し上げました。あの人には投票いたしません」

「じゃあだれに投票するんだ？」

アリストトーテレスは目でぐるりと室内を見回し、最後にラミールを見据えた。

「ムンデイーニョ・ファルカンです」

老人はステッキにすがって立ち上がった。顔が真っ青だ。

「冗談じゃなからうな？」

「言った通りにお取りになってください」

「それなら、この家から出て行け」と言っ指でドアを指し示した。「とつととー」

アリストトーテレスは動揺することなく静かに出ていった。そのまま『日刊イリエウス』編集部に出かけて行き、クローヴィス・コスタに言った。

「おれがムンデイーニョ氏を支持すること、新聞に書いていいぞ」

一方、ジェルーザは椅子の下にくずおれている祖父の姿を見つけた。

「おじいちゃん！ どうしたの？ なにがあつたの？」大声で母親と家政婦たちを呼び寄せ、医者と呼ばせようとした。

回復した老人が頼む。

「医者なんかいらん。必要ない。アマンシオくんを呼んでくれすぐに」

医者たちはベッドでラミール大佐を診なければならなかった。デモーステネス先生はアルフレードとトニコに説明した。

「かなり強い精神的ショックを受けたようですね。二度とこんなことが起こらんように注意しなきゃ。もう一度起こったら、今度は心臓が持たんよ」

アマンシオ・レアルが到着した。ちょうど昼食を取ろうとしていたときに知らせが届き、不安な家族を残して出てきたのだった。アマンシオはラミールの部屋に入った。

一面に大きく「イタブーナがムンデイーニョ・ファルカンの発展事業をバックアップ」と見出しが掲げられた『日刊イリエウス』が市中に巡回しているころ、アリストトーテレスは輸出業者とともに港口の浚渫船とタグボートの見学から帰る船の上にいた。潜水夫が海底まで潜るところ、掘削機が架空の動物よろしく砂を食べる場所に立ち会ったのだった。アリストトーテレスはいつものように気さくに笑う。一緒にマリヤードの港を建設しましょうなどとムンデイーニョは語るのだった。

銃弾がアリストトーテレスの胸を撃ったのは、ナシブのバールで

何か飲もうとウニヤンの空き地をムンディーニョと横切っているときだった。

「酒は飲めんですが…」と言いかけたところでアリストレーレスは倒れた。

黒人がひとり飛び出し、丘の方へ走ってゆく。現場の目撃者がふたり、後を追った。輸出業者が行政長官の体を抱きあげた。生温かい血がシャツを真っ赤に染めている。野次馬が集まり、たちまち人だかりができた。

遠くで叫び声が聞こえる。

「捕まえろ！ 人殺しだ！ 逃すな！」

（続く）